

本日をもって平成25年度の活動が終わります。日々の学習活動、校外での学習、学校行事などを通して子どもたちはたくさんのお話を学ぶことができたと思います。

歴史の浅い桐光学園小学校ですが、これまでに子どもたちと作り上げてきたことを在校生が引き継いでくれていると感じることがたくさんあります。ただ、先輩たちができたことが後輩たちに当たり前のようにできるかと言えばそうではなく、一定のレベルを保つためには毎年繰り返されなければならないことがたくさんあります。「挨拶をする」「時間を守る」などもそうです。大切なことをしっかりと身につけるためには、常に目の前にいる子どもたちの今をスタートラインにしなければならないと感じるこのごろです。

『できて当たり前!』ということはないのかもしれませんが。

【感謝の気持ちを伝えます】

卒業式を前に、小学校では「6年生を送る会」が5年生の企画のもと行われました。1～5年生がこれまでの6年生との関わりを振り返りながら感謝の心をこめて卒業のお祝いをするというものです。

ステージ上の座席に着いた6年生に対して届けられる下級生からの感謝のメッセージ。その一つひとつを少し照れくさそうに聞きながら、何だかとても嬉しそうにも見えました。「ありがとう」という言葉は多くの人を嬉しい気持ち、幸せな気持ちにさせてくれます。そういう気持ちを伝えられると「よし、またがんばろう」と思えます。言い換えれば、誰もが家族や友だちを「ありがとう」という感謝のことばで嬉しい気持ち、幸せな気持ちにさせることができるということです。

優しさと思いやりの心を「ありがとう」の言葉で伝えられるって素敵です。

さて、3月生まれのある6年生の誕生日カードのメッセージとして次のように書きました。

「これから進む中学校では、自分の思いが努力しただけかなう場面が多くなります。逆に、それは努力しなければ前に進めないことが多くなるということでもあります。どちらのルールに自分を乗せることができるでしょうか。私はあなたのこれからの活躍に期待しています。」

12歳の子どもたち、その半分の6年間を小学校で過ごしてきて、いろいろなことができるようになりました。その中には困難なこともあったと思いますが、それを乗り越えて今があります。これからも強い気持ちをもって大切な日々を過ごしてほしいです。

小学校では日常生活の中で、一人ひとりが明確な目標を持ち、それに向けて努力できることを望ましい姿と考えますが、そこまでしっかりと考えて日々の生活を送ることはなかなか難しいです。そうすると個々への支援として、私たちから何らかの声かけをすることになります。子どもたちがいつか、自分で次にしたいことややるべきことを考え、それを実行できるように成長してくれることを願いながら。

【いじめに気づいたら】

2010年の群馬県桐生市、2013年の神奈川県湯河原町であった小学生、中学生の自殺では、どちらもいじめが原因であったことが裁判や第三者委員の調査などで分かりました。

いじめとされる行為については、「臭い」「きもい」などの継続的な悪口や仲間はずれ、そしてときに浴びせられる「死ぬ」などというひどい言葉、さらには暴力についても報告されていました。新聞によると、小学校6年生の児童は教室の離れた場所で一人で給食を食べるなどの様子も見られたとのことでした。当然ながらそれを放置していた学校の責任は非常に重いとしかいいようがありません。また、中学生に対する暴力などにしても、授業と部活の時間のほんの短い時間に見られたとのことでした。

いじめの調査をしていくと、何人もの子どもたちが関わっていることがだんだんと分かってきて、その子どもたち一人ひとりがしたことを検証していくと、その個々のことがらが自殺に結びついているとは考えにくいと言う人もいます。しかし、重要なことは、いじめを受けている子どもがどのような気持ちで日々の生活を送っているかということです。

桐光学園小学校でも、ときどき子どもたちの様子を見ていて気になることがあります。友だちや下級生に対して、心を傷つけるようなことを言っている子はいないか、気にいらぬことがあると暴力をふるう子はいないか。残念ながらないとは言えません。私たちは子どもたちのそういう言動に気づいたときは、しっかりとその事実に向き合います。まずはいじめられていると思われる子どもに寄り添い、話を聴きどういう対応をするのがよいかを考えます。事実確認と今後の対応についてできるだけ学年、学校の課題としてチームで取り組んでいきます。そして状況や指導方針を保護者に説明し、理解をいただけるようにしていきます。

いじめと認定するかしないかが大事なのではなく、子どもにときどき見られる、人を傷つけてしまう発言、叩いたり蹴ったりする暴力がある場合は、それは絶対に許されないことであることを子どもに理解させなければなりません。「このくらいだったらたいしたことではないのでは？」は加害者側の都合のよい解釈でしかありません。いじめに対しては皆さんと気持ちを一つにして向き合っていきたいと思います。